
けいおん！-その手を握れたら-

桜の木の下で見る月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！—その手を握れたら—

【Nコード】

N82590

【作者名】

桜の木の下で見る月

【あらすじ】

三年メンバーが卒業して、梓たちが3年になって始まりを彩る桜が舞う季節、
軽音部に入部するのは・・・
いろいろな意味で新しい出会いが始まります。

すでに共学化している設定です。オリ主などキャラの崩壊があるかも・・・

初めての投稿作品になります。拙い文章かもしれませんが見てくれると

うれしいです。

プロローグ

「やっと着いた。」

手に持っていた紙を見る。そこにはへんてこな絵と汚い字で書かれた住所が書かれていた。

「今日からここに住むのか。」

目の前にはとあるマンション、こんなところで高校生が一人暮らして贅沢すぎだろ！

「まあいいか。荷物はもう届いているだろう。さっさと荷解きしないな。」

始めまして、俺の名前は雲雀 司

今年の春から桜が丘高校に転校することになりました。3年生だ。

桜が丘高校は2～3年前から共学化されたらしい。

それでも男子はそんなにいないらしい。

各学年に20人いるかどうかも怪しい。

「はぁ かったるい」

なぜ桜が丘高校に転校するかというと、アホな話だが
今から話すことはフィクションではないぞ。よく聞いてくれ。

思い出すのは3日前のことだ。

司「ただいまー」

？「おかえり」

司「あれ 父さんめずらしく今日は早く帰ってきたね。」

父「まあな それより司 大事な話がある」

司「なんだよ 急に そんなに改まっちゃってどうしたんだよ？」

父「・・・海外に転勤が決まってな この家を売り払うことになった。」

司「へえ海外に転勤か で父上様 俺はどこに住めばいいんだ（怒）」

父「意外と冷静だな こらちょっと待て そのトンカチはなんだ

（冷や汗）

司「ちい ばれたか でどうなんだ」

父「ふうー とりあえず お前には二つの選択がある

一つは転校して一人暮らしするか もうひ 「じゃあそっちで
えっ？」

司「だから 転校の一人暮らしを要求する。」

父「もう一つは聞かないのか？」

司「どうせ 海外について行くなって選択だろ！」

父「まあ そうだが決めるの早すぎだろ！！ もうちょっと悩め」

司「嫌だ！ っていうかなぜに転校？ 俺 今年、大学入試が
あるんだぞ！！」

父「面白そうだから ってコラ！！ そのトンカチを振り下ろそ
うとするな！！」

危険じゃないか（冷や汗）

司「そんな馬鹿な事を言う奴は土に帰れ！！ ヒュン」

父「うわぁ 危ない ストップ！ ストップ！ 父さん司をそんな子に育てた覚えはないぞ！！」

司「育てたのは 母さんだろ。」

父「まさかの発言！！」

司「でどこに転校するんだ？」

父「変わり身はやつ 転校先は桜が丘高校だ！」

司「あれえ 桜が丘高校って女子高じゃないのか？」

父「知らなかったのか！ 2～3年前から共学化してたはずだぞ。」

司「そうなのか？」

？「そうよ 私の友達からきちんと聞いておいたから確かよ！」

司「へえ なら安心だな！ 母さん ただいま。」

母「お帰り つー君 これは母さんが処理しておくから部屋の荷物まとめておいて！」

父「母さんや これ扱いはひどくはないかあ？」

母「あなたは私の下僕じゃないの？ つー君もうマンションの一室借りておいたから

明日には荷物送るわよ！」

司「明日！ 早すぎだろ 学校はどうするんだよ。」

母「学校にはもう連絡したわよ。 明日からつー君は早めの春休みよ！

書類ももう貰っちゃてるし！」

司「はやっ！！ えっ 転入試験は？」

母「ないわよ！ あそこの校長が私の友達の・・・ でね
試験免除してもらっちゃった。 てへ」

司「はいっ？ なにそれ 怖いんですけど（ブルブル）
しかも準備早いよ！ 何その手際の良さ！」

母「つー君 この世界には気にしたらいけないことがたくさんある
のよ！

それでも聞きたい！？」

司「いえ いいです お断りします。」

母「残念ね まあ・・・ ほら あなたもいい加減にきなさい！
！」

父「下僕 私は下僕^{ハァハァ}」

司・母『だめだこいつ 早くどうにかしないと』

・・・そういえば桜が丘高校ってこのマンションからどれくらいの距離なんだろう？・・・

ふと、荷解きをしていた手が止まった。だがまたすぐに動き出した。

「荷解きが終わったら、買い物について一度行ってみよう。」
そう、つぶやいて。

・・・30分後・・・

「やっと終わった。やっぱり高校生には贅沢だよな！」

荷物を片付けてもまだガラッとしてるな（ハア）後でホームセンターに行かないと」

せめてもうちょっと大きいカーテンを買わないと持ってきたカーテンがサイズ合わなすぎだよ。

でないと外から覗き放題だよ！

コツコツ・・・トントン さて出かけようかな。

まずは桜が丘高校に書類を届けないと、さすがに課題とか渡されないよね。

とりあえず行こう トントンと足音がする

i podの曲を聴きながら、歩き出した。最初の曲は（アンダーグラフのツバサ）だった。

新しい学校、新しい生活・・・おもしろいことがあるといいなあ

そんなことを思いながら澄み渡る青空の下を歩いていった。

キャラ紹介

雲雀ひばり 司つかさ

高校3年、年はまだ17歳の予定

身長・・・170以下 体重・・・60キロらへん

顔・・・中の上 性格・・・優しいけど怒らせると大変

パーソナルスペースを大事にしている

母からの謎に含まれる英才教育によって
楽器のほとんどはそれなりにできる。

かなりの方向音痴 勉強は上の中辺りの予定

雲雀 父

国と国に橋を架けるらしい仕事をしているらしい？

母に絶対服従している

雲雀 母

俗に言う完璧人　ただ？の性癖を所持している

司に自分のはまった物をなんでもかんでも指導した。

後は話しだいで変えていく可能性があるのです
基本の設定はここまでです

キャラ紹介（後書き）

何日も投稿できなくて
ごめんなさい

言い訳はしません
頑張っているのでぜひ読んでみてください

01 はじまり

「ここであつてるよな、さすがにここまで迷うとは思わなかったけど」

そう、僕は爽やかに？歩きだしたんだ。

最初は、住宅街に、次は隣町 その次は・・・

何度も人に聞き返して恥ずかしかった。

一番は前に通っていた高校に行つて元担任に

「ここになににきたんだ。お前の高校はあっちだぞ」

といわれたことだ。うん、思い出すだけで顔が真っ赤になる。

落ち着こう。深呼吸だ。スーハー・・・

よし行きますか！！ 桜が丘高校の門をくぐった。

ここはすごいな、右を、左を向いてもほとんどが女子なんだから

男子なんて2・3人しか見てないや。

さすがもと女子高だね！

さて、ここでまた道を間違えるのも恥ずかしいし、

誰かに聞くとしよう。前のほうに黒い髪のツインテールさんがいる。ビラを配っているみたいだ。さて頑張って声をかけるか！

「軽音部です。音楽に興味がある人、初心者也大歓迎です。ぜひ体験しに来てください。」

やっぱりだけどなかなかビラもらって行ってくれないな。はあー

「あのーすみません」

ギター来たよ。落ち着け梓　ここで失敗したらダメなんだから

「入部希望者ですか？」　期待の目

目がまぶしすぎる、どうしよう

「えーと　ごめんなさい」

「そんなー　じゃあなにか用ですか？」　ガーン！

「申し訳ないんだけど職員室への行き方を教えてくれないかな」

「いいですけど　転入生さんですか？」

「はい、そうですよ」

「珍しいですね。　男子がここに転入なんて」

「そうなんですか？」

「はい、共学化したのにあまり男子がいないので転校してくる男子も少ないんですよ。」

「へえ、肩身が狭くなりそうだな　はあ」

「そんなにため息をつかなくても　まあいいです」

「ここが職員室です」

「ありがとう　ツインテールさん」

「ツインテールさんって私のことですか？」

「はい、そうですよ。　名前お互いに教えていませんし」

「そういえば、そうだね　私は中野　梓　あなたは？」

「僕は雲雀　司です　3年に転入する予定ですね。」

「3年にじゃあ一緒にの学年だね！　よろしく雲雀君」

「こちらこそよろしくね！　中野さん」

「そうだ雲雀君　音楽に興味ない？」

「音楽ですか　それは先ほどの勧誘ですか？」

「まあそうなっちゃうよね　うん勧誘だよ！」

「考えておきます。とりあえず書類を職員室の先生にわたさないといけないので」

「考えておいてね！　じゃあね雲雀君」

「さよなら　中野さん　勧誘頑張れ！」

「うん、ありがとう！」

中野さんは駆けてビラ配りに戻っていった

そして僕は職員室に入ってしまった。

「失礼します。転入の件でお世話になる　雲雀　司です　転入に必要な書類をもってきました。」

「おつかれ　あなたが雲雀君ね。　話は聞いているわ。書類はあとはこっちで処理しておくわ。」

「明日から普通に通ってもらうからよろしくね。　後、連絡があるから早めに学校の職員室に明日来てね。」

「わかりました。　それじゃあ失礼しました。」

軽音部か　面白そうだし考えておこう。　と考えながら司は校門を出て帰っていった。

P S　司はね　またね　道に迷ったんだってさ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8259o/>

けいおん！-その手を握れたら-

2010年11月25日04時19分発行